

※ 解答は、《解答欄》に書きなさい。

ポイント

- ・人物の心情を表す情景描写に着目する。
- ・文章の構成を捉え、内容理解に生かす。

次は、青田さんが創作した文章です。

絶好のチャンスが訪れた。

守の右足から放たれたボールが、飛び出してきたキーパーをあざ笑うようにゴール左すみへと転がった瞬間、陽の落ちかけたグラウンドにこの日一番の歓声と悲鳴が響いた。

「よし、やつと追いついた。」

守は、同点ゴールを確信していた。ところが、回転のかかったボールは、ゴールに近づくにつれて左へと曲がり、無情にもゴールポストの外へとそれた。速くまで転がるボールをばら然と見送る守の耳に、試合終了のホイッスルが届いた。

そのとき、守の周りから全ての音が消えた。

グラウンド中央、相手ベンチ、応援席、そして自分たちのベンチへと、十一人のメンバーが小走りで移動し、キャプテンのかけ声で一列に並び、「ありがとうございました。」と頭を下げる。試合後の一連の動きを、守たちはこの日もくり返した。しかし守は、この日、自分がどうやって移動したのかを覚えていない。生まれて初めてといえるくらい大きなショックを受けていた。

守が我に返ったのは、表彰式のときだった。この試合は、県大会出場をかけた決勝戦だったため、試合後すぐに、両チームのベンチ入りメンバーは大会本部の置かれたテントの前に並んだ。

一年生でただ一人のレギュラーである守の立ち位置は、チームのいちばん端だった。守は、だれよりも自分たちのベンチに近いところにいた。守の目は、先生の横に並ぶ二人の先輩の姿を捉えた。二人は、最後の大会なのに選手登録から外れた三年生だった。

目をまつ赤にした二人は、手を後ろに組み、両足を開き、前を見ずえていた。守の方に向かって長く伸びる二本の影は、少しも揺れることはなかった。守は、はっとした。きつと、自分の影は、整列のたびに、チームのだれよりも力なく揺らいでいたに違いない。そう思うと、自分自身が小さく感じられた。

守は、小学生の頃からヒーローだった。「県内屈指のサッカー選手」として、鳴り物入りで中学に入学した守は、卓越した個人技で、わずか二か月の間に「弱小」と言われていた学校を「強豪」に変えた。

だから、決勝の舞台でも、きつと自分が点を取り、小学生時代と同じく、当然のように県大会へ進めるはずだと思っていた。

ところが、この日は試合開始直後から相手チームの徹底したマークにあい、結局、ノーゴールに終わった。何一つ自分らしいプレーをさせてもらえなかった。初めての経験に、守は終始イライラしていた。今思えば、最後のシュートが外れたのも、イライラのせいだったのだ。

「来年こそ、優勝してくれよ。」

小柄な三年生、森のつぶやきが隣から聞こえてきた。最後のシュートの場面、守へのラストパスを出したのは森だった。守は、その横顔に目をやった。閉じられたままの目から涙がこぼれ、森のほおを伝った。

このとき、①守の目が開かれた。

これまでの自分の活躍の裏には、たくさんの先輩たちの支えがあつたのだ。それを忘れず、明日からはチームのために走り回り、チームのためにシュートを決めよう。守は、固く心に誓った。

1

2

--	--	--	--	--

3

4

--	--

5

シート 24 正答例

- 1 エ
- 2 きつと、自
- 3 (例) てんぐ、鼻高々
- 4 対照
- 5 ア